| 群教セ | J01 - 01 |
| --- | --- |
| | 平18.233集 |

# 児童の自尊感情を高めるための指導の工夫

## －充実感・達成感・有用感を実感させる学習の実践を通して－

特別研修員　　大隅　敦史　　(板倉町立北小学校)

《研究の概要》

本研究は、特殊学級に在籍する児童が生活単元学習における学びを通して自尊感情を高めていくことを目指した実践研究である。

具体的には、充実感・達成感・有用感を実感できる生活単元学習「ムシキングワールドを作ろう」の授業実践から、自分のよさや活動を通しての変容に気付かせようとした。その積み重ねにより、よりよくなろうとする意欲や態度を育成し、自尊感情を高めようとした。

キーワード　〔人権教育　自尊感情　充実感　達成感　有用感〕

### Ⅰ　主題設定の理由

群馬県教育委員会では、平成16年１月に「群馬県人権教育推進計画」を発行し、本県の人権教育の指針を明示した。本研究は、その中で示された８つの人権課題の中の「子どもたち」に関する「自分のよさに気付くための学習」に関わる研究である。

本県では小学校における人権教育の重点として、体験・交流活動を通して、児童が自分で気付くことを目標とし、育てたい能力・態度も明確にしている。本研究は、その中に記された自尊感情を高めることを目的とするものである。

本学級は特殊学級であり、二人の児童が在籍している。二人は四年生と六年生の兄弟であり、軽度の知的障害がある。二人は特殊学級を中心に学習を進めているが、音楽・体育等で通常の学級と交流学習も行っている。

本研究を進めるにあたり、児童二人の学校生活での実態を以下のような傾向ととらえた。

二人は、普段の生活や学習の中で「だめだ。」「やりたくない。」「めんどうくさい。」等と言って、物事をあきらめてしまい、何事においても努力したり最後まで成し遂げようとする意欲が不足がちである。活動に対しての意欲が乏しく、物事を成し遂げた経験が不足している。また、周囲の人から認められる経験も少なく、自分自身に自信がもてないでいる。

このような傾向を改善していくために、よりよくなろうとする意欲や態度を高め、より高い自尊感情を育成していくことが必要であると考えた。

その具体的な手だてとして、必ず通らなければいけないこととして、三つの要素を考えた。

「がんばれた。」と感じる充実感、「できた。やり遂げた。」と感じる達成感、「認められた。役に立った。」と感じる有用感を実感できる体験学習活動のことである。

そのことを踏まえて、今年度の生活単元学習では、児童が興味をもちながら充実感や達成感・有用感を実感でき、そのことで自尊感情を高めることができる活動を考え、『ムシキングワールドを作ろう』とした。

ムシキングワールドとは、二人の共通な関心である世界のカブトムシ・クワガタムシに関することである。長期間学習できるように、持続力・集中力に乏しい二人の実態を考慮し、二人が特に興味がある世界のカブトムシ・クワガタムシをテーマに選ぶことにした。活動を通して主体的に学習させる中で、充実感や達成感を実感させようと考えた。

さらに、特殊学級の児童の現状を考えた時に、多くの児童と交流する機会を意図的に設定していくことも必要となってくる。交流する中で「いい作品が作れたね。」「すごいな。」のように仲間に受容され認められるような有用感を実感することもまた、自尊感情を高めることにつながっていくであろう。

このように、充実感・達成感・有用感を実感できる学習活動を積み重ねていくことで、自分のよさや能力、活動を通しての変容等に気付かせ、自分に対する自信をもたせようとした。そうするこ

とで、よりよくなろうとする意欲や態度のあるより高い自尊感情が育成していけると考えたからである。

## Ⅱ　研究のねらい

児童が興味をもって学習できる生活単元学習『ムシキングワールドを作ろう』を学習することを通して、充実感・達成感・有用感を実感することで、自分のよさや能力・活動を通しての変容に気付き、自尊感情が高まることを実践を通して明らかにする。

## Ⅲ　研究の見通し

見通し１

生活単元学習『ムシキングワールドを作ろう』を学習していく上で、興味をもって継続的に学習でき、「がんばった。」と思える充実感や「できた。」と思える達成感を実感できる場を設定していくことで、自分に自信をもち、自分のよさや能力・活動を通しての変容に気付くことができるであろう。

見通し２

生活単元学習『ムシキングワールドを作ろう』を学習する中で、「役に立った。」「認められた。」と思える有用感を実感できる場を設定していくことで、自分に自信をもち、自分のよさや能力・活動を通しての変容に気付くことができるであろう。

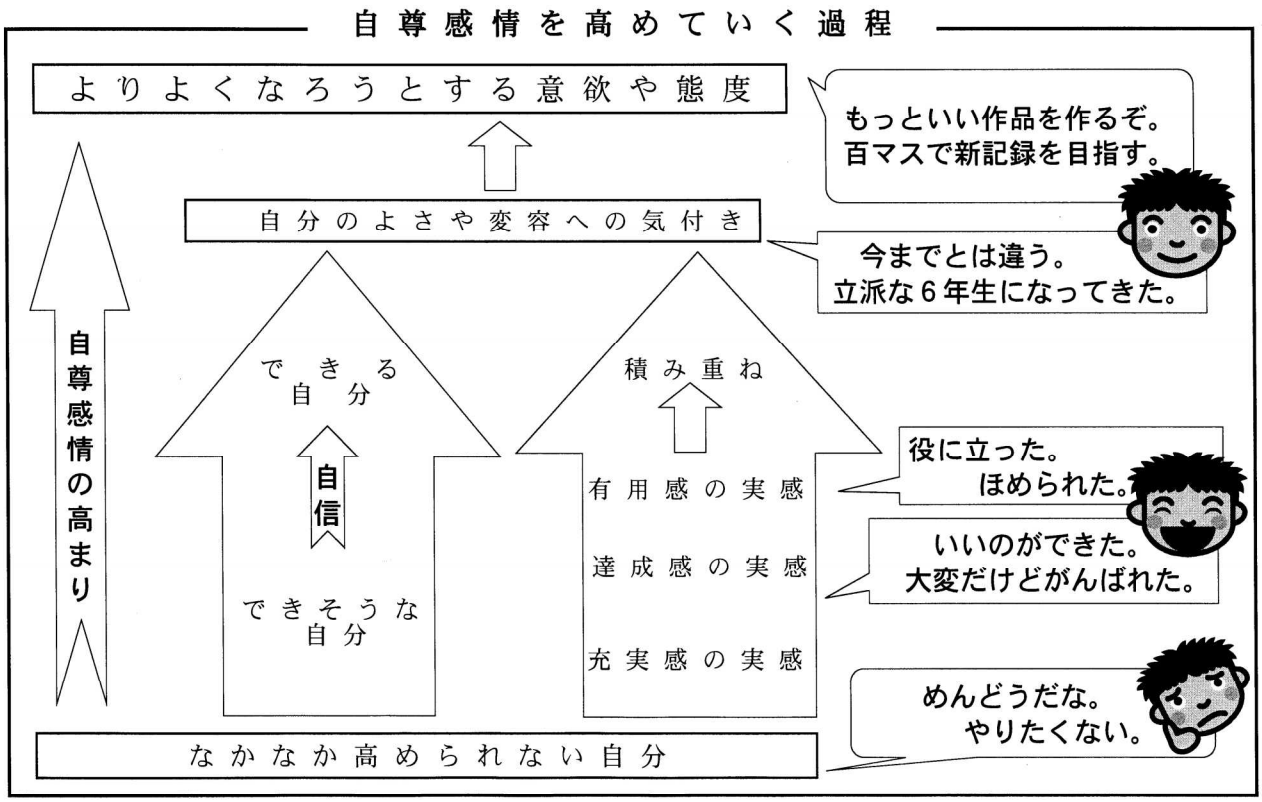
見通し３

充実感・達成感・有用感を実感できる活動を積み重ねていくことを通して、自分に対する自信を高め、自分のよさや能力、活動を通しての変容に気付かせることで、よりよくなろうとする意欲や態度を育成し、自尊感情を高めていくことができるであろう。

## Ⅳ　研究の内容

### １　基本的な考え方

ここでは、自尊感情を高めていく過程を下図のように考えた。



また、基本的な用語を以下のように考えた。

○「なかなか高められない自分」とは、「このままでいい。」「これでいい。」のような自分の存在を認めながらも「面倒くさい。」「やりたくない。」のように向上心に乏しい気持ち

○「よりよくなろうとする意欲や態度」とは、「もっとよくなりたい。」「新記録を目指そう。」のような前向きな自己目標を設定でき、それに向かって挑戦する等、今の自分よりさらによりよくなろうとする意欲や態度

○「充実感」とは、「がんばった」と思える目的を達成しようとする過程に感じる満足感

○「達成感」とは、「できた」と思える自分の目的を自分の工夫と力で達成した満足感

○「有用感」とは、人から認めてもらうなど、人の役に立っていると感じる気持ち

## 2　実践の概要及び結果と考察

### (1)　実践の概要

（ア）学習活動

○目標
活動を通して、自分のよさや変容に気付かせ自信をもたせることで、よりよくなろうとする意欲や態度を育てる。
○学習の流れ(全２０時間)
①発表会および作品展に向けての課題作り
②課題にそったムシキングワールド作り
③発表会に向けての準備
④学校公開日を活用しての発表会
⑤作品展への展示
○評価方法
全教育活動を通して、よりよくなろうとする意欲や態度を児童の言葉や行動から見付ける。

（イ）ムシキングワールド作り

「先生、今年の作品展どうする。」と児童は普段の生活の中でしばしば聞いてきた。作品展とは、年一回地域の特殊学級と養護学校が共同で開催する展示会のことである。児童にとっては、この作品展に向けて何を作るのかは大きな関心の一つであった。そこで、その作品展を活用して本学習を進めることにした。児童の能力が発揮されよりよい作品ができるように、できた作品を学校公開日に発表して、その発表で学んだことを生かして作品展に出品しようとした。

二人に「何が作りたい。」と問いかけたところ、児童二人とも「大好きなムシキングを作りたい。」と言ってきた。その後、具体的な活動について児童と教師で話し合い、学習内容を決定していった。そして、自分たちが力を合わせて最高の作品が作れるように意識させ、「ムシキングワールドを作ろう」と課題を決定した。

具体的な活動として児童が考えたことは、ジオラマの作成である。まず材料を校庭から拾ったり、家から持参する等して集め、次に、切り株を発砲スチロールを基礎にして粘土で作り上げた。それから、切り株の上に粘土で作り上げた世界の昆虫を載せ、対決している様子を表現しようとした。〈世界のカブト・クワガタの対決〉(資料１)

この活動の中心となった昆虫作りは児童がもっとも興味を示したところで、「もっと作りたい。」の連続であった。

こうして柱となる活動を一本決めて、それ以外にも児童が興味を示した他の教科との関連がある活動をも課題にした。具体的には、国語の学習と関連させた昆虫採集作文やその応用の紙芝居、算数の学習と関連させた「ムシキングすごろく」、社会の学習と関連させた「世界の昆虫マップ作り」等を行った。

資料１　世界のカブト・クワガタの対決

（ウ）作品展に向けて

活動中は、お互いの活動を尊重しながら協力し合って自分の活動ができるような学習にした。

兄に「みんなのやること決めてくれるかな。」等と促し、兄に教師を含めた三人の活動を決めさせた。「上手に作る作り方も教えてね。」等と言って、兄が教え役になるようにした。

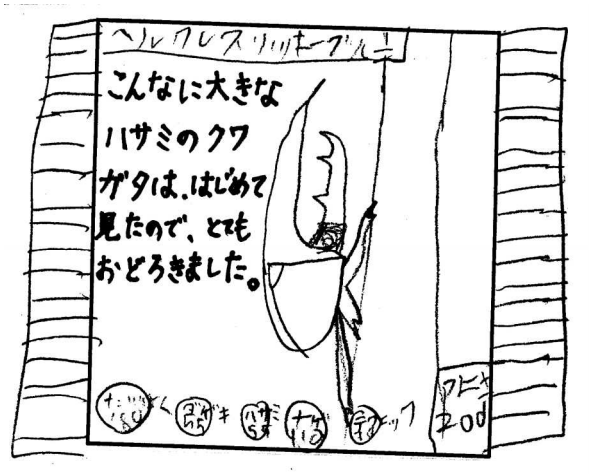
作成した作品等を紹介する発表会は学校公開日等を活用して開催した。発表会に向けて児童は発表の内容を自分達で考えた。兄は発表の台本を弟

の分まで考え、発表方法まで実際にやってみせて何度も繰り返し練習した。

発表会当日には、多くの来客者の前で自分たちの作成した作品やできた喜び等をクイズを交えながら堂々と発表することができた。

発表後に見学者から「こんなに大きなハサミのクワガタは初めて見た。」等書いていただいたので、「うれしかった。」「みんなに認められた。」と言いとても喜んでいた。〈交流に来た児童や保護者・参観者が書くムシキングカード〉(資料２)

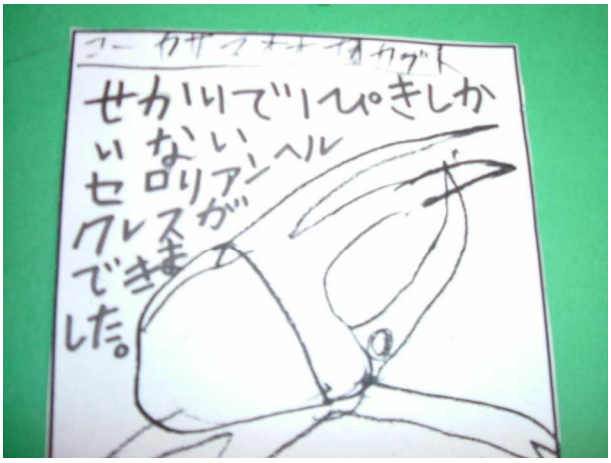
資料２　交流に来た児童や保護者・参観者が書くムシキングカード




（エ）授業の終末で書くムシキングカード

毎回授業の終末で、できたことやがんばったことなど自信の裏付けになるような行動をムシキングカードに記入させ、背面黒板ムシキングの森に掲示させた。〈二人の児童が書くムシキングカード〉(資料３)

資料３　児童が書いたムシキングカード




また、授業の終末に児童にメッセージを書き（教師が書くムシキングカード）読み上げた。カードを通して、「うまくできた。」「世界に一つしかないヘルクレスができた。」等児童のつぶやきや学習している児童の努力や姿を伝えた。さらに、「授業中、ずうっと集中してできるようになったね。」等活動を通しての変容も伝えた。この教師が書くムシキングカードもまた背面黒板ムシキングの森に掲示するようにした。

このように、背面黒板にムシキングの森を作成し、日々の努力や自信の表出であるムシキングカードを貼らせるようにした。

(２)指導方針

実践を進めるにあたり、次のような事に留意して指導した。

（ア）教師と児童の思いが共有できる課題作り
（イ）充実感・達成感が実感できる授業作り
（ウ）有用感が実感できる授業作り
（エ）自分のよさや変容が自覚できる環境作り

(３)結果と考察

**（ア）教師と児童の思いが共有できる課題作り**

児童が自分のよさや能力・活動を通しての変容に気付くことができるようにするためには、毎時間、充実感や達成感を実感できる授業構成にすることが必要であると考えた。

そのためには、課題作りがとても重要であった。集中力・持続力に乏しく、学習になかなか興味を示さない児童が長期間にわたって作品を仕上げることには大きな困難が伴う。そこで、児童の生活の実態に即して「本当にやってみたいこと」「自信をもってできるもの」「自分のよさをおもいっきりだせるもの」から課題や学習計画を考えさせるようにした。

教師主導の課題作りでは、ついつい課題の押しつけになってしまう。そこで、課題を児童自身の目的にするため、教師主導型から脱却し、児童が苦労してでもしたいことから見つけさせるようにした。

しかし、課題は好きなことなら何でもよいとするわけではなかった。よりよい自分がだせるもの、負の要素を克服していけるもの、意欲的に集中して長時間継続できるもの、学習内容が児童の努力によって成し遂げられる難易度であるもの等を満たした課題であること等を必要条件とした。

興味のあることの中から児童が上記のような内容の課題が作れるようにすることが必要であった。児童が自分で作った課題と思えるように、教師の考える内容のある課題を児童自身の口から言わせるようにした。そのために児童の興味のあることの中から、「みんながすごいと思うものを作

ろうよ。」等と呼びかけたり、「どうすればもっとよくなるかな。」等と聞いたりするようにした。そうすることで、教師と児童の思いが共有になるような課題になるようにした。

その結果、今まで「できない。」「いやだ。」と言って、なかなか学習活動に意欲を示さず、また学習を始めても５分程度の持続力しかなかった児童が「ムシキングワールドを作ろう」の学習では４５分間継続して学習するようになってきた。

また、ムシキングワールドの学習がある日は、朝から「今日は４時間目だね。」と言ったり、前日から「明日は楽しみだな。」と言ったりして活動をとても楽しみにしている様子であった。活動中に「今日もがんばったぞ。」とか、作成した昆虫に自分で名前をつけて「世界に一つしかないセロリアンヘルクレスができた。」のように、その時の自分の学習に満足していたようであった。

**（イ）充実感・達成感が実感できる授業作り**

大きな学習の流れを一時間の中で充実感・達成感が実感できるように区切るようにした。授業の終末で、やり終えた時に次の時間の課題を把握させた。授業の終末で「どんどんよくなっていくね。」等と話しかけ、学習しながら、レベルアップがわかるようにし、より高い目標に迫らせるようにした。そして、「次の時間にはどこまで完成させようか。」等と聞き、児童に達成可能な目標を言わせるようにした。すると、より意欲的になり、毎時間目標に向かって集中して学習するようになった。

こうした学習と並行して他の教科においても変容がみられた。本学習以外の国語や算数の学習においても集中力・持続力が向上し、今まで長続きしなかった漢字練習や計算練習などの基本的な反復学習においても「ようしやるぞ。」と言って長時間学習できるようになってきた。

さらに、一つの学習をやり終えると「やったー。」「できたー。」と言って、二人とも笑顔でいっぱいになり、やり終えた達成感を実感するようになってきた。

このことは、本学習で身に付けてきた態度を他の学習にも反映させることができたからであると考えられる。ムシキングカードを通して、本学習における児童の学習姿勢を教えたり、児童自身に思い出させたりして、その態度を賞賛し続けることで自信をもたせた。そして、その前向きな姿を他の教科においても実行できるように促した成果である。

このように、興味をもって継続的に学習でき、充実感・達成感を実感できる場づくりをしたことで、児童は意欲的に学習できるようになってきた。また、「ぼくはできる。」「よくなってきている。」等自分のよさや能力、活動を通しての変容に気付くことができるようになってきた。

**（ウ） 有用感が実感できる授業作り**

有用感を実感させるためには、仲間や地域の人々との交流が必要である。そこで、毎時間「弟の役に立った。」「兄の役に立った。」のような有用感が実感できるような活動にした。力を合わせていいのができてきたね。」等の兄の言葉からわかるように、児童が二人とも「役に立った。」と実感できる共同制作にしたことが有効だった。

また、兄に活動の指示をさせるようにすると、兄が弟のことを考慮して活動を考えたり、世話をしたりするようになってきた。すると教師が指示しなくても、兄は、活動の中心となり、活動の具体的な方法を示しながら「ぼくは、昆虫を作るよ。先生はここをぬって。」等活動の指示を出すようになってきた。「ぼくはみんなの役に立つぞ。」と言って張り切って活動した。

このことから、リーダーシップをとらせたことや、経験して理解したこと等を他の人に教えさせたことで、有用性を高めることができたと考えられる。

このように、有用感を実感できる場づくりをしたことで、「みんなの役に立てるようになった。」「認められた。」等自分のよさや能力、活動を通しての変容に気付くことができるようになった。

**（エ）自分のよさや変容が自覚できる環境作り**

自分のよさや自信の表出であるムシキングの森がいつも意識できるように、ムシキングカードのデザインやムシキングの森の構想も定期的に児童に考えさせ、随時更新していくようにした。

また、学習プロセスのわかる大型アルバムを作成し、学校公開日の発表会で紹介した。アルバムには、活動の様子を写真にはり、努力している姿や活動を通しての変容をコメントとして書き加えた。そうすることで、児童と保護者・地域の人々に児童の努力や変容を伝えた。このアルバムは、いつでも見られるように教室に置くようにした。

さらに、授業や日常生活等全教育活動を通して、自尊感情の高まりを示す言葉や行動を発見し、毎日連絡帳に書くようにした。それを帰りの会で読

み伝えることで、児童によさや変容を自覚させ、自信をもたせるようにした。連絡帳に書くことで保護者からも「えらいね。」等とほめてもらえるようにした。

このように、普段から全教育活動の中での自尊感情の高まりを児童に意識させるようにした。

その結果、兄は算数の時間に学習していた百マスかけ算では、以前は４分前後で終え、やり終えると「つかれた。もうやりたくない。」等言っていた。しかし、最近では「一分台のタイムを目指す。」と言って自分で目標を設定し、そこに向かって挑戦するようになった。また、「もう一回やらせて。」「家で練習してくる。」等意欲的に学習するようになってきた。さらに、この自己目標も達成すると、大喜びで「やったー。」と叫んだ。その後、「また新記録を目指す。」と言って新たな目標を設定するようになり、いつも自己記録の更新を目標にするようになってきた。

弟は、以前は詩を読むことも苦にしていたが、今では「今日も全部読む。」と言って、「白いぼうし」や「いろはにほへと」等の物語を全文音読するようになってきた。

このように、活動を通して児童の意欲や態度に変容が見られた。ムシキングの森を見たり、アルバムを見たりしながら「今までとは違う。」「立派な６年生になってきた。」「このことを先生に教えるから聞いてね。」等自信の表出と思える言葉をよく聞くようになった。

このような変容は、「何度もやるから余裕になるんじゃん。」という兄の言葉からも推測されるように、毎時間、充実感・達成感・有用感を実感できる授業を積み重ねた成果である。活動を通して、自分のよさや能力に気付き、同時に自分への自信を高めていったからだと思われる。

さらにそれらの学習と並行して、向上心を高める自作の環境構成(ムシキングの森)とアルバムや連絡帳等を通して自分への自信をもたせたことで、よりよくなろうとする意欲や態度を育成し、自尊感情を高めることができたと考えられる。

## Ⅴ　研究のまとめと今後の課題

### １　研究のまとめ

本実践では、よりよくなろうとする意欲や態度が身に付いていくことが、自尊感情の高まりととらえ実践してきた。

そこで、充実感・達成感・有用感を実感させ、自分のよさや能力・活動を通しての変容に気付かせ自信をもたせていく中で、自尊感情を高めていこうと考えた。

具体的な手だてとして、下表に記す実践を行った。

| |
|---|
| ○教師と児童の思いが共有できる課題作り |
| ○充実感・達成感が実感できる授業作り |
| ○有用感が実感できる授業作り |
| ○自分のよさや変容が自覚できる環境作り |

このような手だてを通して変容してきた児童の姿を、児童自身が自覚するようになってきた。そして、「自分で目標を立て、進んでできるようになった。」のように教師が伝えた言葉を自分から言うようになってきた。さらに、そのような事を自主的に実践するようになってきた。また、そうした意欲的な態度が全教育活動を通して見られるようになった。

このことは、一つの活動を通して高まった自信を、他の活動にも反映させようとした成果であると考えられる。

このように、児童によりよくなろうとする意欲や態度が身についてきており、本実践を通して、自尊感情が高まってきたと考えられる。

### ２　今後の課題

「自尊感情を高めよう」と課題を設定した時、自尊感情をどのようにとらえるかはとても困難な問題であった。本実践では、それを「よりよくなろうとする意欲や態度が身に付いていくこと」とその有能性に視点をあててとらえたが、他にもいろいろな考え方がありうると思う。

本実践では、自尊感情を高める手だてとして、充実感・達成感・有用感を実感させることを通過点とした。しかし、この三つの通過点以外の有効な手だてを探ることもまた必要だろう。例えば、命の尊さへの気付きや家族に大切にされている安心感の育成等である。

群馬県教育委員会では、自尊感情を独自性・有能性・統合性の３つの感覚をその構成要素としている。ここでは、主にその中の有能性について実践を進めたが、今後は、今回明らかにすることができなかった独自性や統合性についても考察していきたいと考えている。